

# 現代台湾における女性の婚姻形態と動向

蕭英玲・利翠珊  
(王嘉臨・林庭禎訳)

本稿は、家庭社会学の観点から本特集号のテーマである「東アジアの女性と結婚」の解題を行うものである。具体的には、まず過去三十年間における台湾の婚姻率、婚姻形態および婚姻観を概観した。次いで、婚姻生活における男女の性別役割と力関係、婚姻生活における女性の適応問題と満足度の二つの面から現代台湾女性における婚姻関係について整理した。こうした作業を通じて伝統的な思想や風習と新しい価値観に挟まれた現代の台湾女性が婚姻生活の中でいかに夫と同等の地位を確立していくかという議題に対して「女性教育、経済および社会資源の向上」・「婚姻生活を運営し、配偶者の意識変化を促す」の課題を指摘した。

中国人社会では、「結婚」とは家庭を作り、親族ネットワークを広げる基礎だと見なされた。それは夫婦の役割分業を規定する規範と責任だけでなく、同時に個人に社会経済の資源及び安全保障を提供する源でもある。過去では、「結婚」

が一種の義務だと見なされ、特に夫側の家庭への従属が要求されていた。しかし、個人主義の強化、教育の普及、女性の就業率の増加により、台湾女性にとって「結婚」はもはや「長期飯票」（女性の生活の長期的保障）ではなく、感情の交流と男女の平等が求められ、個人の発展が重視される場となった

た。社会や人口構造の転換および価値観の変化は、台湾における従来の結婚の概念を解体させ、台湾における婚姻形態と婚姻の動向に多面的な様相をもたらしている。本論文では、まず過去三十年における年台湾の婚姻率、婚姻形態および婚姻観を紹介する。次に、婚姻生活における男女の性別役割と力関係、そして婚姻生活における女性の適応問題と満足度という二つの面から現代台湾女性の婚姻の動向の分析を行ったうえで、現代の婚姻生活で女性がいかに同等の地位を確立していくかについて筆者の見解を提示したい。

## 一、過去三十年間台湾における婚姻形態の変化

### 1 台湾における婚姻率の変化

台湾における婚姻動向は人口の変遷、伝統的な風習と連動している。台湾の粗出生率は一九五五年にピークに達しており、以降辰年による一時的出生率上昇を除いて、概ね低下傾向にある〔内政部戸政司、二〇一一年a〕。また、一九五〇年代のベビーブーム世代が成人して結婚適齢期を迎えた結果、粗婚姻率が上昇し、一九八一年に九・二九％に達し、戦後の最高値を記録した。しかし、出生率の減少の影響で結婚適齢期人

口が年々減少し、粗婚姻率の低下をもたらしている。中でも一九九〇年、一九九八年、二〇〇四年、二〇〇九年が特に目立っている。その原因は台湾の伝統的な風習である「孤鸞年」と密接に関わっている。「孤鸞年」というのは立春が年に二回ある年のことであり、「春」とは「桃花」（中国語で浮気の意味がある）という意味が含まれ、その年に結婚すると浮気が起こりやすいと昔から言われ、結婚に適さない年とされている。これに伴い、上述した四つの年が「孤鸞年」にあたることから婚姻率が大幅に下がり、その年を過ぎると回復することになる。全体としては、台湾の粗婚姻率は一九八〇年代から低下傾向に転じ、二〇一一年の時点では七・一三％となった。二〇〇八年の婚姻率を諸外国と比較すると、台湾婚姻率は中国やアメリカを下回ったが、シンガポール、日本、韓国、ヨーロッパを上回った。

次に、初婚率と再婚率から台湾における婚姻形態を見ていくと、過去三十年間男女の初婚率が大幅に低下している。一九八一年において男女の初婚率がそれぞれ六二・七％と九一・九％であったが、二〇〇一年にはそれぞれ三〇・二％と三七・一％に減少した。女子の初婚率が男子に比べて高い割合となったが、その格差が年々縮小している。初婚の平均年齢は新郎が三十一・八歳、新婦が二十九・二歳となり、三十

蕭英玲——台湾輔仁大学児童と家庭学科副教授兼学科主任。婚姻生活における力関係、親密関係に関する質的研究を専攻。現在は、婚姻関係の質的変化、家務の分担などを研究。論文に、「婚姻満足度と憂鬱傾向：貫時性配偶分析 (Marital Satisfaction and Depression: A Longitudinal Dyadic Analysis)」〔中華心理學刊〕第五一卷四号、二〇一〇年〕、「台湾同志伴侶與夫妻關係品質之比較研究 (A Comparative Study of Relationship Quality of Same-sex Couples and Married Couples in Taiwan)」〔彰化師大輔導與諮商學報〕第三二卷二号、二〇〇九年〕などがある。

利翠珊——輔仁大学児童と家庭学科教授、台湾家庭生活教育專業人員協會 (Taiwan Council on Family Life Education Association) 中華家政学会 (Taiwan Home Economics Association) 理事。婚姻感情、世代間関係を専攻。現在は、夫婦関係における感情、忍耐などを研究。論文に、「代間照顧關係：台灣都會地區成年子女の質性訪談研究 (The Inter-generational Care-giving Relationship: A Qualitative Inquiry of Adult Children's Experience in Urban Taiwan)」〔中華心理衛生學刊〕第三三卷一號、二〇一〇年〕、「妻間的恩情與親密：簡效量表的發展 (Development and Validation of a Brief Version of Chinese Marital Affection Scale)」〔本土心理學研究〕第三二號、二〇一〇年〕などがある。

王嘉臨——台湾淡江大学助理教授。

林庭禎——台湾淡江大学大学院生。



写真1 高慈美の父母である高再祝、高許美の婚礼写真。

1910年4月21日に撮られたこの写真では、新郎はフロックコート (Frock coat)、山高帽 (Bowlerhat) に黒革靴、一方隣に座っている新婦は伝統台湾式の衣装といった伝統文化と西洋文化が入り混じった婚礼衣装の組み合わせ、当時の過渡現象が反映されることが分かった。



写真2 高慈美、李超然の婚礼写真。

1937年に撮られたこの写真では、新郎はモーニングコートを身に付け、手に帽子を取り、新婦はウェディングドレスを着ていた。この写真から、この時期に至ると過渡期の伝統文化と西洋文化が入り混じったスタイルから離れて、結婚式での衣裳の洋装化が定着していることが分かった。  
(※写真1、2ともに台湾中央研究院台湾史研究所資料館提供。キャプションは台湾中央研究院台湾史研究所ホームページから引用し、日本語に訳したもの。)

年前と比較すると初婚年齢が四〜五年遅くなった。また男女の平均初婚年齢差は二・六歳であり、「男大女小」(夫の年齢が妻より高い)という婚姻観を持続していることが明らかになった。過去三十年間における再婚率推移からみると、男女の再婚率はともに低下する傾向を呈しており、二〇一〇年では男女の再婚率がそれぞれ二五・〇%と一一・九%で、男女を比較すると男性の方が高く、女性の再婚率が男性の四八%に過ぎず、初婚率と異なった結果を示している。

## ② 離婚率の上昇

全体傾向としてまず目立っているのは一九八一年から二〇〇三年にかけてそれまで安定的に推移していた粗離婚率が上昇傾向に転じた点である。それまでの〇・八三%から二・八七%にまで上昇し、そして男女の有配偶離婚率も四・一四%、四・一五%であったのがそれぞれ一二・八%、一三・二%にまで上昇した。二〇

〇三年以降離婚率の上昇傾向はやや緩み、二〇一一年の時点では二・四六%となっている。他の先進諸国における離婚率と比較すると、台湾の粗離婚率はアメリカには及ばないものの、シンガポール、日本、中国を上回り、韓国と並ぶ水準である。

さらに結婚持続期間から離婚状況を分析してみると、一九八八年〜二〇一〇年において結婚〇から五年が最多であったが、過去最多の下降幅で約一〇%減少した。また結婚二十年から二十九年の離婚者が急激に上昇し、五%に達した。この調査結果から依然として結婚年数の短い夫婦の離婚率が高いことが明らかになったが、最近では、結婚期間が長い熟年離婚の増加が顕著になっていることがわかる。

## ③ 結婚適齢期の未婚率の上昇

一九八九年に結婚適齢期(二十五〜三十四歳)の未婚率は男性三八・五%で、女性二〇・八%であった。ところが、二〇一〇年には男女それぞれの未婚率が六九・一%、五三・〇%となり、二〇年前より三割以上増え、晩婚化・非婚化が急速に進んでいる。

## 2 台湾における婚姻状況の現状と推移

過去三〇年間における台湾の婚姻形態構成比を見ると、その比例分布には大きな変動がなく、内政部の統計によると配

偶関係別人口は一九八一年には男女有配偶人口が最も多く、次いで、未婚の順であり、離婚と死別が最下位となった。現在もこの傾向を維持し、二〇一〇年の時点では男性の有配偶者、未婚、離婚、死別の比率はそれぞれ五二・六四%、三八・一六%、六・八二%、二・三八%となり、女性の比率は五一・二〇%、三一・六六%、七・四一%、九・七二%となっている。全体的に言うると、有配偶者人口の下降幅が大きく、また離婚人口の増加が著しい。また、男女別に比較すると未婚は女子が男子より低く、離別は女子が男子より高い。男女による離別、死別の差は女性の結婚率が高いことと女性の平均寿命が男性より長いことと関連している。

台湾における婚姻形態の推移を詳しく検証するために、楊静利、陳寛政、李大正(二〇〇八)は一九八〇年〜二〇〇五年までの婚姻生命表を作成し、十五歳以上の男女について各婚姻形態別の変動の確率を推定する。計算結果によると、一九八〇年の時点で男女それぞれの結婚経験率が九六%を超えていたものが、二〇〇五年になるとその割合は七七%に低下し、約二割減少した。また、有配偶から離婚に転じた確率も大幅に増加し、一九八〇年に男女とも夫婦一〇〇組あたりの年間離婚組数は一〇であった。ところが、二〇〇五年に有配偶から離婚に転じた割合は男性の二七・三%に対して女性



は三一・〇％に達している。さらに、離婚から有配偶（すなわち再婚）に転じた確率においては男性に大きな変化がなく、比較的落ち着いた動きを示しているのに対して、女性は二％に低下し、男性より女性のほうが再婚しにくいことが分かる。この結婚生命表は各婚姻形態の平均持続期間を提示している。この表から、男女とも結婚年齢の上昇と離婚率の増加に伴い、有配偶の持続期間が短くなっていくことが示唆される。また、再婚率の低下から離婚や死別による持続期間が長くなっていることが明らかになった。特に女性における死別、離婚の平均持続期間が約三二年で、今後母子世帯や女性の単独世帯の状況が顕在化していくことが考えられる。

### 3 台湾における婚姻観の変化

①「男高女低」（男性の年齢・身長・学歴・収入などがすべて女性より優位と望む、結婚に対する価値観）の婚姻観の変化

台湾の伝統的な婚姻では「門当戸対」を重視し、つまり家格と社会的地位、経済的地位が釣り合っていることが理想とされてきた（蔡淑玲一九九四）。両家の社会、経済的地位が同レベルである前提の上で、さらに「男高女低」が求められる。すなわち男性の家庭内での権威を維持し、また父系社会における性別役割に相応するため、男性が年齢・学歴・収入、社会的名声において女性より高くなければならない（楊静利、

李大正、陳寛政二〇〇五）。ところが、女性の就学率、就業率の上昇とともに、学歴、収入といった面において男女の格差が縮小し、「男高女低」という昔ながらの婚姻観を維持するのはもはや容易なことではない。その結果、「男女平等」または「女高男低」に変わりつつある。楊静利、李大正、陳寛政の研究によれば、大学卒業者は学歴において自分よりも高学歴の配偶者、いわゆる「女高男低」という婚姻観を比較的に受け入れやすく、大学院卒業者は結婚意欲が低く、非婚の志向が強い。一方、配偶者年齢と収入という面では、依然として伝統的「男高女低」婚姻観を維持している。

### ②国際結婚の上昇

台湾では結婚適齢期の男女の人口差のため、「剩男」（残男）という社会現象が発生している（奇摩ネットニュース二〇一二年三月二十八日）。さらに伝統的な「男高女低」の結婚観がこの現象に拍車をかけ、よって社会的地位、経済状況が低い男性はなかなか見合う相手を見つけることが出来ず、「国際結婚」をする男性が増えていった。特に台湾政府が一九八七年に中国への親族訪問を解禁し、また「南向政策」を推進したため、大陸、東南アジア諸国との交流が活発になった結果、国際結婚の婚姻数が急増した。二〇〇三年に国際結婚の婚姻数がピークに達し（三一・九％）、二〇〇四年政府による

外国籍配偶者訪問政策の実施により、国際結婚の割合が減少し始め、二〇一〇年の時点では一五・五％に減少したとは言え、依然アジア諸国で国際結婚の割合が一番高い国となっている（行政院主計処二〇一）。

## 二、現代台湾女性における婚姻関係

社会の変遷及び人口の変化は、直接的にまたは間接的に婚姻に影響を与えただけではなく、更に家庭関係にまで影響が広がっている。以下、「婚姻生活における男女の性別役割と力関係」と「婚姻生活における女性の適応問題と満足度」の二つに分け、現代台湾女性における婚姻関係について詳しく探究していきたい。

### 1 婚姻生活における男女の性別役割と力関係

陳玉華、伊慶春、呂玉瑕（二〇〇〇）は五〇〇組の夫婦を対象に、ランダムサンプリング調査を行った。現代台湾の家庭では「夫婦二人で決める」というのが主な方式である。女性は、学歴及び収入の増加により、家庭での影響力が高まっており、なかでも「子供の教育」と「家庭の支出」の二項目が注目されている。

現代台湾の女性にとって、婚姻自体は「我が家庭」を築くという意味ではなく、「男家族」の嫁になるという父系家族

制度の考えを持っている人が多い。しかし、女性の経済的自立により、大家族と同居し、財産、家計を共有する必要性がなくなり、さらに近年の法律の改正により、自己の姓の上に夫の姓を冠する冠姓、夫方居住、財産管理権といった規制が解除され（陳惠馨二〇一一）、伝統的な婚姻と比べると、現代の台湾女性は父系社会の規範から解放されつつあると言える。

だが、婚姻における女性の地位は夫と肩を並べるくらいに、果たして、権利や義務が保証されているかどうかは疑問に思われる。現代の台湾女性は家庭の中の低い地位から解放され、そして政策や法律での権利が平等に近いにもかかわらず、多数の研究が示しているように、実際は、法律に規定されていることとはいまだ乖離している。例えば、家事を担当するのは依然として女性であり、既婚女性の家事労働時間は男性の五・六倍である。（蕭英玲二〇〇五）また、結婚後、夫の親と同居する割合は妻の親と同居する割合に比べてはるかに多く、こうした同居の形態は夫婦の力関係の差異により生じたことと考えられる（陳建良二〇〇五）。また、財産の継承や分配においては、法律で男女均等であるにもかかわらず、女性は常に相続する権利を放棄すべきだと要求されている（陳昭如二〇〇九）。

心理人類学の学者許烺光は、西洋社会では「夫婦関係」を

軸とし、華人社会では「父子関係」を軸としており、つまり華人社会における家庭の中で「父子関係」は一番重要で、「夫婦関係」は比較的それほど重要ではないとしている。[Har' 1971]しかし、社会における変遷の過程で、台湾は徐々に伝統的な「父子軸」の社会から西洋の「夫婦軸」の社会へ移行しつつあると台湾の心理学者の楊國樞〔一九七七〕が指摘している。この中で、二つの「混合型の家庭」はかなり高い割合を占めている。楊氏によると、混合型の家庭にいる成員はそれぞれの価値観の違いにより、家事の分配、子供の教育、家庭内の裁量権、就職、財産権益、親戚付き合い、友達関係、名字の選択・呼称、浮気、離婚といった面において問題が生じやすい。

この十項目を詳細に分析してみると、「父子軸」家庭における家族内の男女の不平等な力関係、つまり父系社会の規範と関連するものが多い。言い換えれば、混合型の家庭における女性の地位はこの家庭の他の成員がいかに「夫婦軸」に傾けるかによって決められている。それは同時に「妻一人で家事をする」、「夫一人で家庭の重大事を決定する」、「義父母に順服する」といった女性の置かれた不平等な状況の改善にもつながっている。

高旭繁、陸洛〔二〇〇六〕はこの問題をさらに詳しく探究

## 2 婚姻生活における女性の適応問題と満足度

上述の議論から見ると、制度的に男女平等が保障されている現代においても伝統的な男女の性別役割と社会規範の中で女性は様々な制限を受けている。特に婚姻制度における嫁娶婚という婚姻形態により、女性は婚姻生活で様々な調整や適応を余儀なくされる。

利翠珊〔一九九五〕は台北地域の結婚五年以内の夫婦一六組を対象に、インタビュー調査を行った。彼女の研究によれば、台湾の夫婦関係に父系家族の論理が強く働いていることが分かった。例えば、家族価値観、家族資源、そして夫方親との同居などがあり、それも夫婦関係、また女性の婚姻生活への適応に強く影響している。インタビューをうけた女性の中で、婚姻生活においてコミュニケーション頻度の高い相手は、夫ではなく、義父母であるという女性もいる。また利氏の研究から、多くの女性は婚姻生活の中でストレスを感じているが、それを一種の責任だと考えている。こうした女性の婚家につくし、責任を担おうとする考え方は伝統文化、また自身の家庭からの影響もあった。例えば、インタビューをうけたある女性は実家に帰るたびに、家事をしているのか、義父母の面倒を見ているのかということ自分の親から指摘されることも多いという〔利翠珊一九九五、二八三頁〕。

するため、一五〇組の夫婦を対象として、お互いの伝統性と現代性という性質が夫婦の適合度に及ぼす影響、さらに婚姻生活における適応問題との関連について調査した。その結果、伝統性の観念が目立った夫あるいは夫より現代性の観念を持つ妻の場合は、「意見が一致する割合」がどちらも低い。さらに、伝統性／現代性における夫婦の適合度から婚姻生活における適応状況をみていくと、「男性優越」という項目において妻より得点が高い夫は、妻に婚姻生活への適応にマイナスの影響を与えることが見られた。以上の結果を整理すると、伝統的観念に固執する男性は、自身の婚姻生活への適応にマイナスに影響するのみならず、妻にまで影響を及ぼすのである。

利翠珊〔一九九二〕も伝統性／現代性という基準でアメリカに留学している台湾留学生夫婦を対象に分析を行い、類似した結果を得た。利氏の研究によると、夫の現代性の高低が夫婦双方の婚姻満足度に大きな影響を与え、一方妻ではそうした有意な変化が見出されなかった。また、夫婦を現代性の得点により分類すると四つの種類に分けることができ、中では現代性思考を持つ夫の場合は、妻が伝統型でも現代型でも、伝統性思考を持つ夫より婚姻満足度が明らかに高い。

また、張思嘉〔二〇〇二〕は結婚三年の夫婦を対象にし、調査したところ類似した結果を得た。張氏の研究によると、新婚夫婦における婚姻の適応問題は婚家との関係、夫婦間関係、家庭と仕事のバランスの三つの部分に分けることができ。その中で婚家への適応が一番難しいという。特に女性と夫の父母との間に見られ、それに対して男性の場合は比較的に気楽である。それは台湾では多くの親が自分の娘を大切にしたい思いで、娘婿を息子のように可愛がるからである。以上から見ると、女性、またその家族は婚姻生活の中で適応を強いられることが分かった。

この問題をさらに深く探究するために、張思嘉、周玉慧と黃宗堅〔二〇〇八〕は適応状態を測定するための尺度を作成し、台北地域の結婚五年以内の夫婦二八八組を対象に、アンケート調査を行った。その結果、前述した婚姻の適応問題における婚家との関係、夫婦間関係、家庭と仕事のバランスの三つの部分の中で、婚家との関係領域、夫婦間関係領域では夫のほうが妻より適応している。一方、家庭と仕事のバランス領域では妻のほうが夫より適応している。また、「家父長制度」、「伝統的な男女の性別役割」が女性の結婚生活への適応にマイナスに影響している。

伊慶春などの研究によると、台湾では男女問わず結婚生活

に入ると、婚姻生活に対する満足度が低い傾向が見出された。なお、婚姻生活の後期に入るとまた回復し、上昇していく傾向が見られた〔伊慶春一九九一、沈瓊桃・陳姿勳二〇〇四〕。一方、蔡詩意などの研究によれば、結婚生活に対する満足度が低いのは女性のみで、男性の場合は婚姻満足度が家族周期とともに変化し、婚姻生活の後期に入ると婚姻満足度が再び上昇していき、グラフは「U」字曲線を描くとされている。〔蔡詩意と胡淑貞二〇〇一〕。蕭英玲〔二〇一〇〕は一致していない上述の見解を明白にするために、結婚三年以内の夫婦を対象に、追跡的、長期的観点から検証した。その結果、結婚三年以内の夫婦においては夫、妻ともに婚姻満足度及び親密性が年々低くなる傾向にあることが分かった。そして、興味深いのは夫側家族との関係、夫側の親と同居しているか否かによって結婚満足度も変わっていく。例えば、妻は夫の家族と仲良くなるほど、夫婦双方の婚姻満足度も高まる傾向が見出された。また、結婚一年目から家族と同居せず、夫婦二人で住む場合は妻の結婚一年目の婚姻満足度が他と比べてやや高い。そして、夫の場合は結婚後三年間の婚姻満足度の下降幅が小さく、婚姻満足度が安定している。

### 三、女性問題から婚姻問題へ

上述した議論をまとめてみると、台湾における社会変遷の過程では、人口の構成変化や女性の就業率の増加によって、晩婚、非婚、出産しない割合が徐々に上がっていく。さらに、離婚人口などが増加しつつある。「妻は働いてはいけない」というような伝統的な考えは無くなってくるが、母親の就業が子供の育ちにマイナスの影響を与えるという考え方が依然根強く残っている。婚姻または家庭を一つの単位として分析すると、保守及び革新の思考を持つ「混合型家庭」は現代の台湾社会における婚姻関係に最も相応しいと学者が指摘した。その中で、女性は様々な方面への適応が男性より困難であり、特に夫の家族と如何に仲良く対応するのかが今後の台湾社会における重要な課題となるであろう。

以下、こうした社会背景で、女性はいかに性別役割の制限を超え、現代の婚姻生活の中で男性と肩を比べるくらいに同等の地位を確立していくかについて筆者の見解を述べたい。

#### 1 女性教育、経済及び社会資源の向上

李青芬などの研究によると、台湾では多くの家庭において、夫は妻に比べて家事や育児をする時間が少ない〔李青芬、唐先梅二〇〇八、利翠珊、陳富美二〇〇四〕。しかし、就労による

社会的、経済的資源の増加で女性が家庭の重大事の決定、ま

た家務の分担の面において裁量権をもつようになった〔呂玉瑕、伊慶春二〇〇五〕。さらには、家政婦を雇うなどの代替方法を通して家庭内における家事労働の負担を軽減できるようになった〔唐先梅二〇〇一〕。陳玉華、伊慶春、呂玉瑕は大量のデータを蓄積し検証した結果、女性の学歴及び経済資源の有無は家庭内における権限を強める効果があることが証明された〔陳玉華、伊慶春、呂玉瑕二〇〇〇〕。このように、現代女性が婚姻の中で地位を高めるためには、資源の増加が重要な鍵と見られる。

#### 2 婚姻生活を運営し、配偶者の意識変化を促す

資源が増えることで女性の婚姻生活における権限と地位が改善されるが、婚姻生活自体は権利を争う場ではない。多くの女性は婚姻生活にうまく適応し、円満な婚姻生活を過ごしたいと望んでいる。しかし前述した通り、女性は婚姻生活で様々な調整と適応を強いられ、また彼女らは婚姻生活で生じたストレスを義務だと思い、抱え込んでいる。このような状況で、単なる女性の権利の向上を強調するだけで女性の婚姻の満足度を高めることができない。これを解決するためには、教育と社会政策を通じ、男性に婚姻生活に対する意識変化を促し、さらに円滑に婚姻生活を営む努力をさせるべきである

う。

また、女性の力も看過できない重要な要素である。利翠珊〔二〇〇五〕は女性個人が自立していくなかで、婚姻に関する研究は単なる家庭構成及び婚姻形式の研究範囲ではとらえられず、過去から現代までの女性個人の努力でもたらした関係変化も考慮していくべきとしている。劉惠琴〔一九九九〕は既婚女性二〇名を対象にインタビュー調査を行い、女性主義の観点から夫婦における衝突とその影響について分析した。劉氏の研究によると、伝統的な婚姻体制から衝突、葛藤が起きた時、女性が問題を先延ばしにし、回避するのではなく、積極的に対処し、関係性を改善していくことが明らかとなった。

このように、近年台湾における婚姻研究は夫婦ペアのデータを用いた研究が中心で、主流となっている。これらの研究成果により前述した筆者の見解の妥当性が証明された。例えば、黃宗堅、葉光輝、謝雨生〔二〇〇四〕の研究が示したように、葛藤に直面する時相手がどのような葛藤解決方略を使用するかによって自身の葛藤解決方略を変え、影響をうける夫婦関係の相互作用が見られた。また、周玉慧〔二〇〇九〕は、夫婦の葛藤解決方略が及ぼす影響について検討した結果、夫婦間の情緒的サポートが婚姻の質の向上に繋がり、一方、



夫婦の衝突が婚姻の質に対してマイナスの影響を与えることが明らかとなった。蕭英玲と利翠珊〔二〇〇九〕の研究では、妻の場合は夫の愛情あるいは夫に対する愛情が婚姻満足度を高める効果があったことが証明された。これらの研究から夫婦の相互依存関係が見出せ、よって婚姻生活の運営は夫婦双方の努力が必要である。だが、妻の積極性また情緒的サポートは女性の婚姻満足度の上昇に対して効果を持つことも否定できない。本研究がこの分野の研究者の研究、ならびに実践現場の関係者の一助となれば幸いである。

#### 参考文献

- Cherlin, A. J. (1996). *Public and Private Families*. New York: McGraw-Hill, Inc.
- Hsu, F. L. K. (1971). A hypothesis on kinship and culture. In F. L. K. Hsu (Ed.), *kinship and culture*. Chicago: Aldine.
- 内政部戶政司 (二〇一一年a)。出生數按性別及粗出生率。二〇一二年四月十六日。出典 [http://www.ris.gov.tw/zh\\_TW/37](http://www.ris.gov.tw/zh_TW/37)。
- 内政部戶政司 (二〇一一年b)。結婚對數、粗結婚率、初(再)婚人數及初(再)婚率。二〇一二年四月十六日。出典 [http://www.ris.gov.tw/zh\\_TW/37](http://www.ris.gov.tw/zh_TW/37)。
- 内政部戶政司 (二〇一一年c)。結婚年齡中位數及平均數(按發生日期)。二〇一二年四月十六日。出典 [http://www.ris.gov.tw/zh\\_TW/37](http://www.ris.gov.tw/zh_TW/37)。
- 内政部戶政司 (二〇一一年d)。離婚對數、粗離婚率及有偶人口離婚率。二〇一二年四月十六日。出典 [http://www.ris.gov.tw/zh\\_TW/37](http://www.ris.gov.tw/zh_TW/37)。

- 楊中芳(主編)。華本土心理學(三三一—三六二頁)。台北：遠流。
- 奇摩新聞(二〇一二年三月二十八日)。剩女不是問題亞洲「大剩男時代」來臨。二〇一二年四月十六日。出典 <http://tw.news.yahoo.com/html>。
- 沈瓊桃、陳姿勳(二〇〇四)。家庭生命週期與婚姻滿意度關係之探討。社會政策與社會工作學刊、八、一三三—一七〇頁。
- 周玉慧(二〇〇九)。夫妻間衝突因應策略類型及其影響。中華心理學刊、五一(一)、八一—九九頁。
- 唐先梅(二〇〇一)。雙薪家庭夫妻在不同家務項目之分工情形及個人影響因素。國立空中大學生活科學系生活科學學報、七、一〇五—一三二頁。
- 高旭繁、陸洛(二〇〇六)。夫妻傳統性／現代性的契合與婚姻適應之關聯。本土心理學研究、二五、四七一—一〇〇頁。
- 陳玉華、伊慶春、呂玉瑕(二〇〇〇)。婦女家庭地位之研究：以家庭決策模式為例。台灣社會學、二四、一一五—八頁。
- 陳昭如(二〇〇九)。在棄權與爭產之間：超越被害者與行動者二元對立的女兒繼承權實踐。臺大法學論叢、三八(四)、一三三—二二八頁。
- 陳建良(二〇〇五)。親子居住安排在家庭內與跨家戶成員間的權力互動。住宅學報、一四(二)、五一—八二頁。
- 陳惠馨(二〇一一年)。從審判實務看台灣婚姻與家庭在過去二十年的變遷。月旦法學雜誌、一九四、九〇—一〇三頁。
- 張思嘉(二〇〇二)。婚姻早期的適應過程——新婚夫妻之質性研究。本土心理學研究(一六)、九—一三三頁。
- 張思嘉、周玉慧、黃宗堅(二〇〇八)。新婚夫妻的婚姻適應：概念測量與模式檢驗。中華心理學刊、五〇(四)、四二五—四四六頁。

- zh\_TW/37。
- 内政部統計處(二〇一〇)。主要國家結婚率。二〇一二年四月十六日。出典 <http://sowf.moi.gov.tw/stat/national/list.htm>。
- 内政部統計處(二〇一一年a)。主要國家離婚率。二〇一二年四月十六日。出典 <http://sowf.moi.gov.tw/stat/national/list.htm>。
- 内政部統計處(二〇一一年b)。人口婚姻狀況。二〇一二年四月十六日。出典 <http://sowf.moi.gov.tw/stat/year/list.htm>。
- 行政院文化建設委員會(二〇〇八)。臺灣大百科全書。二〇一二年四月十六日。出典 <http://taiwanpedia.culture.tw/web/content?ID=11453>。
- 行政院主計處(二〇一一年)。二〇一一年性別圖像。台北：行政院。二〇一二年四月十六日。出典 <http://www.dgbas.gov.tw/public/Data/21910175471.pdf>。

- 伊慶春(一九九一)。臺北地區婚姻調適的一些初步研究發現。國科會人文及社會科學叢刊、一、一五一—一七三頁。
- 呂玉瑕、伊慶春(二〇〇五)。社會變遷中的夫妻資源與家務分工：台灣七〇年代與九〇年代社會文化脈絡的比較。台灣社會學、一〇、四一—四九頁。
- 李青芬、唐先梅(二〇〇八)。家務工作研究進三〇年之回顧。國立空中大學生活科學系生活科學學報、一二、七七—一〇九頁。
- 利翠珊(一九九一)。個人現代性對婚姻滿意度之影響。中華家政學刊、二〇、六七—七五頁。
- 利翠珊(一九九五)。夫妻互動歷程之探討——以台北地區年輕新婚夫妻為例的一項初探性研究。本土心理學研究、四、二六〇—三二一頁。
- 利翠珊、陳富美(二〇〇四)。夫妻的育兒經驗：親職分工與共親職的探討。中華心理衛生學刊、一七(四)、一一—二八頁。
- 利翠珊(二〇〇五)。婚姻關係及其調適。載於楊國樞、黃光國、

- 黃宗堅、葉光輝、謝雨生(二〇〇四)。夫妻關係中權力與情感的運作模式：以衝突因應策略為例。本土心理學研究(二一)、三一—四八頁。
- 楊國樞(一九九七)。父子軸家庭與夫妻軸家庭的運作特徵與歷程。國科會專題研究計劃成果報告、NSC85-2417-H-002-028-G6。
- 楊靜利、陳寬政、李大正(二〇〇八)。台灣近二十年來的家庭結構變遷。論文發表於台灣社會福利學會二〇〇八年年會暨「新世紀社會保障制度的建構與創新：跨時變遷與跨國比較」國際學術研討會、嘉義。
- 蔡淑玲(一九九四)。台灣之婚姻配對模式、人文及社會科學集刊、六(二)、三三五—三七一頁。
- 蔡詩慧、胡淑貞(二〇〇一)。社會人口特質、家庭生命週期與夫妻婚姻滿意度及其差異之研究：一個社區的初探性研究。成功大學學報、三六、二三—四九頁。
- 劉惠琴(一九九九)。女性主義觀點看夫妻衝突與影響歷程。婦女與兩性學刊、一〇、四一—七七頁。
- 蕭英玲(二〇〇五)。台灣的家務分工：經濟依賴與性別的影響。台灣社會學刊、三四、一一五—一四五頁。
- 蕭英玲(二〇一〇年六月)。新婚三年夫妻婚姻滿意度的變化：貫時性對偶分析、宣讀於「華人家人關係」學術研討會、中央研究院民族學研究所主辦、台北市、台灣。
- 蕭英玲、利翠珊(二〇〇九)。夫妻間的恩情與親密：簡效量表的發展。本土心理學研究、三二、三一—四〇頁。